話

題

おとぎの国の資料館・ 豆畑拓男さんのビーンズ邸

五木 のどか

十勝の「豆の聖地」へ

「豆好きにとっての二大聖地と言えば、 北海道のビーンズ邸と姫路のあずきミュー ジアムだと思う」と、前号の豆類時報に書 かせていただきました。

ビーンズ邸のことを書いたかつての探検記(自著:豆なブログ)を振り返ると、もう一度行きたい気持ちが盛り上がり、1月末~2月初めに予定していた札幌行きを工面して空白の1日をつくり、中札内村まで日帰りする計画を立てました。

1月末、吹雪いて電車やバスが止まった らアウト、豆資料館の探検取材は仕切り直 しとなります。天気予報と時刻表を何度も 確かめながら、半分祈るような気持ちで中 札内村に向かいました。

札幌から帯広までJRの特急で3時間弱、 帯広から中札内村小学校前までバスで約1 時間、途中の乗り継ぎ待ちなども合わせる と、札幌からおよそ5時間半かけてビーン ズ邸にたどり着きました(帯広空港から向 かうと、タクシーで20分弱の距離。新千 歳空港から直接JRや高速バスで帯広に向



取材当日、雪景色のビーンズ邸



緑うるわしい季節のビーンズ邸

かい、そこから路線バスやレンタカーなど で行く方法もあり)。

この原稿が載る頃は、緑美しい北海道の 昭和の風情を残す建物が見られるはずで す。が、私が訪ねた日、ビーンズ邸は真っ 白な雪景色の中にありました。

8年半ぶりのビーンズ邸訪問

ビーンズ邸は、十勝で生まれ育った豆畑 拓男氏(34歳)、通称Mr.ビーンズさんの 家をイメージして造られています。

建物入口に「豆畑拓男」の表札、前回はこの館の主に出逢うこと叶わず、おそらく今回も豆畑さんは、諸国漫遊の豆旅中のはず…。私を迎えてくださったのは、ビーンズ邸スタッフの林真悠さんでした。

中に入ると廊下の壁には、昭和27年にこの建物が帯広市幸福町に建設された時の様子、平成17年に建物がこの地に移築された時の様子が展示されています。もともとは農林省馬鈴薯原原種農場の事務所棟だった建物です。血気盛んな昭和の荒くれ男どもが、誇りをかけて建設に取り組む様子が、モノクロームの写真から伝わってきます。現在の青い屋根、白と茶色の壁のカラーリングは移築時にほどこされたものだそう。

その先に、豆資料館・ビーンズ邸を構成 する4つの部屋が広がります。

200種類を超える豆の実物見本

最初の部屋は豆資料館の研究室。まず目に届いたのは、豆の葉っぱが青々と茂る実物大パネルでした。部屋の中央に4体、豆の成長過程がオブジェのように並びます。

スーっと引き込まれるように部屋に入ると、手前の台に円形に置かれた豆の瓶。資料室には北海道の豆、日本の豆、世界の豆が、いくつかの棚やテーブルに展示されています。展示されているだけで約170種類、



海外の豆も色とりどりに展示

バックヤードにもおよそ40種類、加えて 今も増え続けていると聞きます。

さすが、十勝の豆資料館です。「ユキシズカ」や「ユキホマレ」などの大豆、「エリモショウズ」や「きたろまん」「きたのおとめ」などの小豆、「雪手亡」や「福勝」などのいんげん豆…。どれも北の大地で育ったおいしい豆が展示されていると思うと、感慨深いものがありました。

ビーンズさんが集めて来られたという海外の豆は、アメリカ、カナダ、メキシコ、エジプト、ベトナム、中国、韓国に加え、北朝鮮の豆も! 国交が閉ざされる前に入手した貴重な豆が、今もこうして展示されているそう。開館から10年、深い豆の色からも歳月が感じられます。

壁に貼られた写真額には黄色や白、朱赤など、色とりどりの豆の花がキレイです。

子どもたちが楽しめるよう、豆の玩具も 置かれています。大豆や小豆で波の音を出 す竹籠や、うちわと大豆で作った「でんで ん太鼓」などが、なつかしい気持ちを呼び 覚まします。スマホやテレビゲームなど無 かった遠い時代には、豆も玩具に用いられ



竹籠の中には大豆。波の音が聞こえてきます ており、そんな人々の暮らしが見えてくる ようです。小豆の籠を揺らす波音に、十勝 の子どもの仲間入りができたかも? と嬉 しくなります。

ビーンズ邸のキッチンとリビング

次の部屋は、キッチンです。誰もが参加 できる豆料理の教室が開かれたり、レシピ や豆の栄養素などが紹介されていたり。

窓から差し込む明るい陽ざしが、室内を やさしく照らしています。すっきり片付く キッチン。このキッチンで大勢の豆好きな 人たち、子どもたちと一緒に料理を作った ら、さぞかしおいしい料理ができそうです。 十勝のみならず、豆好きな子どもたちを、 たくさん育んでくださいね。

その先の部屋は、ビーンズ邸のリビングルーム。アンティーク調のソファや資料机は、気軽にくつろいで長居ができそうです。

初めてビーンズ邸に訪れたとき、私もこのソファにかけて、嬉々として豆本に見入ったことが思い出されます。小さな小さな手のひらサイズの豆の絵本、手づくりの豆本が数冊ありました。ビーンズ邸のそこ



明るく広々としたリビング

ここに、人の手の温もりが感じられる展示 物が見られます。

かつての職員・豆子ちゃんから、後任の 林さんへ、豆を愛し、ビーンズ邸を慈しむ やさしい眼差しが、そっくりそのまま受け 継がれているように感じました。

資料机には、豆に関する書籍が多数並びます。加藤淳博士の「小豆の力」や姜尚美さんの「あんこの本」など、熟読した本も見つかりました。豆の本、レシピ本、ページを開くと最後、そのまま帰れなくなってしまいそうです。ゆっくり見たい気持ちもそこそこに、第4の部屋へと向かいました。

第4の部屋に続く廊下には、豆料理の見本が展示され、レシピをしおりにして自由に持ち帰ることができるように設置されています。研究室やキッチンも含め、日本豆類協会発行の冊子が設置されているのも喜ばしいことです。

外観からここまでは、豆好きなビーンズ さんの邸宅イメージで、ここから先の別棟 は明治、大正、昭和の北海道開拓と豆の流 通の歴史を色濃く感じる展示室になってい ます。 あとで考えると、この廊下が「おとぎの 国」と「十勝の黎明期」をつなぐ境目のよ うに感じます。

十勝の豆流通資料展示室

豆流通資料展示室を奥から見ようと進むと、最初に目に入ったのは、唐箕(とうみ)という農具でした。幼い頃、実家の小屋にあって、農繁期に使っているのを見た記憶があります。

最初に訪れたとき、十勝の大平原と福岡県の田舎で使う農具が同じものだったことがうれしくて、少し誇らしく感じました。 唐箕は実家から姿を消しましたが、ビーンズ邸の展示室の唐箕は、ハンドルを回すと今でも動きそうです。

壁には大正〜昭和の頃の豆選りをする女性たちの写真がありました。あの時代は唐箕で豆殻と土ほこりと豆を分けたあと、すべての豆を目視で選り分けていたのですね。豆バブルの時代、問屋衆が華やかな宴会に興じる写真も、映画のワンシーンのように映ります。

そんな男たちの栄華は、資料展示室の中央、反対側に掛かる問屋の法被と前掛けからもうかがえます。萩原商店、山崎商店、山本商店、飛岡商店、丸勝、小森照吉商店…。十勝の豆や穀物を誇らし気に扱う男たちの粋な姿が目に浮かび、しばし見入ってしまいました。天晴れ、壮観です!

ガラス貼りの展示資料には、秤やサイズ 選別の道具なども並んでいました。展示室 の資料は、帯広市内の雑穀卸業者「山忠菅



豆問屋の法被と前掛けが凛々しい

岡商店(1962-2000閉店)」で開設していた「豆の問屋の小さな資料館」より委譲されたもの。およそ2千点もの膨大な資料の一部が、ここに展示されています。未公開資料も含め、展示の入れ替えに期待します。

とかち田園空間博物館

ビーンズ邸は、とかち田園空間博物館の一つに指定されています。帯広、芽室、そして中札内、…十勝には美しい景観や自然のほか、人々の営みによって培われてきた伝統や文化など様々な魅力があり、それらを博物館の展示物と見立て、保全・活用しようとする取り組みがあります。それが「とかち田園空間博物館」です。

総面積1,400km (東京23区の約3倍の広さ)という広大な土地に、100年かけて大規模な畑作や酪農を中心とする農業地帯として開拓されました。魅力ある田園空間づくりで、都市との交流を活発に行っていくことが基本方針です。~というような話も耳にしました。

豆の王国・北海道。ビーンズ邸は、十勝 を代表する作物・豆の魅力を内外に伝え、 豆好きな人々を増やしていく役目を担っています。今回の訪問でそのことを知り、私は豆好きの一人として、ここに導かれて来たのかもしれないと思いました。初回は7月に、今回は1月末に、物事に陰と陽があるように、夏と冬の両方を体験することで見えてきた北海道・豆栽培の奥深さ。

広い、寒い、雪深い。この地で豆を栽培 することは、容易に運んだのでしょうか?

十勝の豆開拓の歴史

ビーンズ邸の明るく広々としたリビングには、壁面に沿って湯が流れる暖房器具「オンドル」が設置されていました。豪雪に囲まれていても室内は温かく、居心地が良いのです。ぬくぬくと心地よい空間で、十勝の豆開拓の歴史を聞きました。

北海道の豆栽培の歴史は、明治初期に始まった開拓の歴史と共にあります。四国や北陸、東北あたりから入植した人たちが、海を渡るとき携えた豆は、北海道の土や気候に合う豆となり繁殖してきました。痩せた土地でも育つ豆は当初、自給自足で保存のきく頼もしい食糧だったのです。

日露戦争の頃に帯広駅が開業すると、釧路の大津港を経由して本州にまで、十勝の豆が流通するようになりました。第一次世界大戦では豆の好景気が始まり、十勝の豆は海外に輸出され、いんげん豆の生産が拡大。「豆成金」も登場したとか。

豆問屋は第二次世界大戦時の物価統制に より解体を余儀なくされたものの、戦後の 食糧難で再び豆の需要が伸びたため、栽培 が復活したとのこと。

北海道における豆と、北海道以外の土地 の豆に対する意識の違いは、こういうとこ ろに現れるのかもしれません。北海道の豆 は、ほかの土地の米に等しい、命に近いと ころにある食べ物だったと感じます。

ビーンズ邸のやさしいおもてなし

ビーンズ邸のある中札内村は、2017年 トリップアドバイザーの人気都市ランキン グで全国16位、北海道内ではニセコに次 ぐ2位に選ばれました。

ビーンズ邸は「道の駅 なかさつない」 に隣接することから、観光客の多い春~夏、 秋が賑やかです。中札内村が運営にあたり、 入館料は無料。それもあって、家族連れも 気軽に立ち寄ることができます。

豆に関心があって遠くから訪ねて来る人もいれば、豆を意識することすらなく偶然に立ち寄る人も…。そのせいか、滞在時間5分ほどでサーッと出ていく人もいれば、1時間以上ゆっくり楽しんでいく人もおられるとか。訪れた人の中には、ビーンズ邸がすっかり気に入り、気候の良い時期に繰り返し訪れるファンも多いそう。

緑が生い茂る季節のビーンズ邸は、赤毛のアンが住んでいそうな雰囲気もあって、 絵本の「おとぎの国」に足を踏み入れる感 覚で立ち寄ることができます。

「こんなに広いお家に住みたい」「このソファ、どこで買ったのですか?」「暖炉がステキ!」など、林さんに気軽に声をかけてくださる人も多いそう。

豆のクイズ展示をしたり、料理教室のレシピを作ったり、ビーンズ邸の楽しい仕掛けを整える林さん。子どもたちと一緒に工作教室を開催したり、大豆を育てて枝豆を収穫し食べるところまでロングランの観察会を行ったりするのも林さんの仕事。「ここをキッカケに、豆を好きになってほしい」「少しでも豆に興味を持ってほしい」と話されます。

私が伺った日はちょうどイベント前で、 準備しておられた手づくりの節分豆と「き なこ棒」をお土産にいただきました。

隣接する道の駅には、中札内村の枝豆を 使った食品を始め、村のおいしいお土産品 もたくさん並んでいます。

またいつの日か、大空と緑とブルーの屋根のビーンズ邸に訪れたい。次は帰る時間の心配をすることなく、できればイベントにも参加して、ビーンズ邸周辺の気になる箇所にも足を伸ばし、村で1泊するくらいの贅沢な時間を過ごしてみたいなと思いました。

豆に関わりのある皆さまに、豆の二大聖



中札内の枝豆を使った色々な食品

地のひとつとして、北海道・帯広の中札内 村にあるビーンズ邸にも足を運んでみられ ることをお勧めします。その際は、帯広空 港から向かわれるのがスムーズかと思いま す。

中札内村豆資料館/ビーンズ邸

北海道河西郡中札内村大通南7-14 道の駅なかさつない敷地内 TEL 0155-68-3390 開館時間 9:00~17:00 休館日 12月~3月のみ、毎週月曜日 入館料 無料